

膀胱瘤に人工メッシュ手術

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 18 》

女性の骨盤内の筋肉が緩み、膀胱の一部が腔から出てしまう「膀胱瘤」。近年は、臓器を支える人工メッシュを使った手術が普及しつつあり、県立中央病院では昨年から導入している。

骨盤内には、膀胱のほか、子宮、直腸といった臓器があり、骨盤底筋というハンモック状の筋肉で支えられている。骨盤底筋は出産で大きく引き伸ばされるが、徐々に元に戻ることが多い。だが、高齢化などに伴い筋肉が緩んで臓器が下が



保坂 恭子
泌尿器科科長

再発率低くQOL改善

り、腔から一部がはみ出すこともある。下がった臓器が子宮の場合は「子宮脱」、直腸の場合は「直腸瘤」といい、「膀胱瘤」を含めた総称で「骨盤臓器脱」と呼ばれている。

尿が出にくい、残尿感があるなどの排尿障害や、腔の違和感などが主な症状で、出産経験のある中高年女性がかかりやすい。従来は伸びた腔の壁を縫い縮める手術が一般的だったが、時に再発が起こり、また腔が短くなってしまふのが難点だった。近年、手術の縫

合に使う糸を編んだ布のようなメッシュが開発され、メッシュを使った手術が2010年4月から健康保険の適用になった。

泌尿器科科長の保坂恭子医師によると、身体への負担が少なく、再発率が低いのが利点だ。膀胱瘤の手術では、腔と膀胱の間にメッシュを挿入し、メッシュを

つり上げてハンモックとして機能させる。手術は約1時間、1週間の入院が必要という。導入した昨年夏から5件の実施例がある。

保坂医師は「恥ずかしい」と受診をためらう人もいるが、手術によって生活の質（QOL）を改善できる。メッシュ留置による合併症は皆無ではないが、再発がほとんどなく、腔の形もそのまま保てる」と話している。医師の増員や技術の習得が進めば、子宮脱や直腸瘤の手術についても導入を検討していく考えだ。（第2、4金曜日に掲載します。次回は5月11日です）

膀胱瘤のメッシュ手術

